

さわらび

2020. 1. 21 No. 25 文責：大塚

日常の積み重ねこそ……



令和2年1月。3学期もスタートしました。

まず、年明け最初の動きは、アルミ缶の片付けから始まりました。年末年始にかけて、たくさんのアルミ缶を届けていただきました。なにぶん学

校が、12月28日(土)～1月5日(日)まで9日間も休みだったので、回収箱に入りきらずに周りにあふれており、地域の皆様にはご迷惑もお掛けしました。今後ともよろしくお願ひいたします。

1月9日(木)は5教科の実力テストを行い、翌日からは平常授業です。国語の教科書を真剣に読みふける姿であったり、前日の理科のテスト直しに取り組んだりする姿がありました。授業に前向きに取り組める、本校のいつもの授業風景があります。



また、生徒会の仕事を生徒会長の花奈さんから、2年生3人に引き継ぎました。1月9日の終学活では花奈さんからのあいさつに続いて、3人からの抱負も語られました。

○航聖くん(前期生徒会長)

大きな声のあいさつを大事にしたい。あいさつ運動も地域の方に声をかけて一緒にやりたい。

○虎次くん(後期生徒会長)

忘れ物〇を目指す。「自立貢献」を実現するために、地域の人との交流や活動を増やしていきたい。

○佑希くん(前後期副会長)

もっときれいな学校にしたい。それには地域の人とみんなで行ってみたい。



※本校の目指そうとしているところを、3人が具体的に取り上げてくれています。おとなも一緒に頑張りましょう！

教員の研修の様子から

私たち教員の研修はとても大切なものです。おとな自身が学んでいないと、子どもたちによりよい学習環境や授業を提供していくことができません。

どの学校でもそうですが、基本的には毎週水曜日の放課後を「校内研」(月1回は職員会)として、教員全員での研修を行っています。また、高知県では、すべての学校で「教科間連携のためのチーム会」または「教科の縦持ちのための教科会」を行って、授業をよりよくしていく取組をしています。本校は教員が校長も含めて5名なのでチームに分けることができず毎週の校内研・職員会を「チーム会」と位置づけて、学力向上・授業改善に関わる内容を行ってきました。

1月の研修の一部を紹介します。

■1校1役教育研究

1月17日(金)。四万十市内のすべての小・中学校が参加して、各校の研究実践について発表し合い、自校の取組の検証や他校の取組に学んだりしました。本校は、『キャリア教育・土曜授業』の実践がテーマです。今年度は、①キャリア教育の視点を位置づけた授業 ②総合的な学習の時間での取組「閉校記念誌を作るための卒業生インタビュー」③「好きなことを仕事にしたい！」という内容で報告して、子どもたちの日々のがんばりも伝えてきました。

■理科研修会

1月20日(月)。本来の水曜日の校内研修を月曜日に変更して、講師を迎えて行いました。講師は、高知大学教育学部准教授の中城満先生です。当初理科の研修会として計画したのですが、「ぜひ職員みんなでも聞いて他の教科にも役立つところを学び合おう」との目的で、全員参加で実施しました。また、市内の他の中学校からも4名の理科の先生方が参加してくれて、有意義な会となりました。どの教科にも共通する授業の基礎基本について、理科をとおして学ぶことができました。



言葉のダシのとりかた

長田弘

■この欄に使う詩を探していて、この詩に出会いました。最後の2行、「他人の言葉は…つかえない」「いつでも自分の言葉を…」が心に残ります。「自分の言葉」は、自分で考えて行動しようとしていないと生まれないものではないでしょうか。学校教育目標の『自立・貢献』につながると思います。

かつおぶしじゃない。
まず言葉をえらぶ。
太くてよく乾いた言葉をえらぶ。
はじめに言葉の表面の
カビをたわしてさっぱり落とす。
血合いの黒い部分から、
言葉を正しく削ってゆく。
言葉が透きとおってくるまで削る。
つぎに意味をえらぶ。
厚みのある意味をえらぶ。
鍋に水を入れて強火にかけて、
意味をゆっくりと洗める。
意味を浮かあがらせないようにして
沸騰寸前サツと掬いとる。
それから削った言葉を入れる。
言葉が鍋のなかで踊りだし、
言葉のアクがぶくぶく浮いてきたら
掬ってすくって捨てる
鍋が言葉もろともワツと沸きあがってきたら
火を止めて、あとは
黙って言葉を漉しとるのだ。
言葉の澄んだ奥行きだけがのこるだろう
それが言葉の一番ダシだ。
言葉の本当の味だ。
だが、まちがえてはいけない。
他人の言葉はダシにはつかえない。
いつでも自分の言葉をつかえねばならない。